

押しかけメイドの恋人

もうすぐ、この家を出ていかなくてもはいけない。

ようやく涼しくなってきた秋の日、高城千紗は持つていく荷物をまとめて、大きなスーツケースに詰めていた。

千紗は十歳のときにこの家に引っ越してきた。父はそれなりに名の通った会社のオーナー社長で、高級住宅地に建つこの家は非常に大きく、庭も広い。ガレージには何台も外車が停められていて、プールもあった。

千紗は三歳年下の弟と共に両親に可愛がられ、お姫様みたいな暮らしをしてきた。子供の頃から長期の休みごとに海外に連れていってもらい、毎年のバースデイには華やかなパーティーも開いてもらった。

何もかも、みんな懐かしい思い出だ。

でも、それも今日でおしまい……

千紗は目を上げ、自室を見回した。

二十歳になったときに、千紗はこの部屋を自分の好きなように模様替えさせてもらった。子供っ

ぼい家具やカーテンなどを大人びた落ち着いたものに一新したのだ。あれから二年が経ったが、今もこの部屋のインテリアはとても好きで、居心地がいい。

しかし、家は売却され、こうした高級家具も処分されることになっている。父の会社が倒産したのだ。父はなんとか破産を免れたものの、今までの贅沢な暮らしを維持できなくなっていた。

もちろん、このわたしも……

涙が溢れそうになったが、千紗はまばたきをして涙を散らした。自分や両親を憐れんで泣くのはもうたくさんだ。泣いたところで事態は変わらない。これから強く生きなければならぬのだから、しっかりと生きては。

両親は父の郷里に帰る予定だ。そこで祖父が営む食堂を手伝うことになっている。大学生である弟の正登は、奨学金をもらいつつ、バイトをしながら生活するらしい。そもそも正登は自立心が強く、大学入学時からバイトをしていたし、今も友人と部屋をシェアして暮らしている。実家だった家がなくなるのは淋しいだろうが、現状として何も困ってはいない。

千紗は今春大学を卒業して父の会社で働いていたため、家と同時に職も失った。大学時代の友人が自分のアパートに来てもいいと言ってくれているので、少しの間そこに転がり込むことにした。次の仕事を見つけてから一人暮らしのためのアパートを探す予定だ。弟に比べると、なんだか情けないけれど、倒産のショックですぐには職を探すことができなかった。

でも、これからは違うわ！

これからは親に頼らず自立派に生きていこう。でも少し不安だ。千紗は今までなんの疑問も持たずに親が敷いたレールの上を歩いてきた。親の薦める大学に入り、卒業後も言われるままに父の会社の受付として半年近く働いたが、そのことになんかの疑問も抱いてこなかったのだ。特にやりたいこともなかった。子供の頃はピアノなどいろんな習い事をしたものの、熱心に取り組んではなかったで、身になっていない。ボランティアをしていたこともあったが、長くは続かなかった。

家事は家政婦がなんでもやってくれていたから、何もできないに等しい。学校での調理実習で覚えたメニューを、ぎこちない手つきで家で作ってみたくらいで、料理ができると言えるレベルではない。

ただどこ家政婦を雇えなくなつてからは、すべてのことを母と自分でしなくてはならなくなった。千紗はほとんど何もできないので、母の手伝いをしてきたが、これからそれを自分一人でやれるのかと言われると、まったく自信はない。

こんなわたしが本当に自立できるのかしら……？

これからのことを考えると、とてつもなく不安になってくる。しかし、両親と一緒に田舎に引っ込むわけにはいかない。両親の心労を間近に見た千紗は、いつまでも親に頼り切りではないけなないと初めて気づいたので。

弟には『気づくのが遅すぎる』と言われたが、言い返すこともできなかった。まさしくそうだからだ。

ここで自立できなかつたら一生このままだわ！

どんなに不安でも、自分の力でやっていかなくてはならない。

千紗はなんとか一つ目のスーツケースに荷物を詰め込んだ。持っていきたいものはたくさんあるが、全部は無理だ。友人のアパートに大量のものを持ち込むわけにはいかない。

手にしたカエルのぬいぐるみを見て、溜息をつく。

子供じやあるまいし、こんなもの持っていないはずじゃないの。

ぬいぐるみやベッドの上に置いたが、やはり捨てるのは惜しくて、スーツケースに無理やり押し込む。これは大好きな人からもらったものなのだ。生活にはまったく必要ではないが、大切なものである。ここに置いていいたら処分されるだけだから、持っていくしかない。

千紗は二つ目のスーツケースを閉め、改めて部屋を見回した。

ここを出ていったら、二度と戻ってくることはないんだわ。

両親に守られ、なんの不自由もなく暮らしていた日々も戻ってこない。

スーツケースを一階まで運ぼうとしたとき、門に設置されているインターフォンのベルが鳴り響いた。

誰かが出てくれるからとそのまま作業を続けようとしたが、ふと家政婦がもういないことを思い出す。両親も今は外出中だ。千紗は慌ててインターフォンの画面を覗いた。

そこには、整った顔立ちの男性の姿が映っていた。誠実で真面目そうな雰囲気の際は、真剣な眼差しをしている。カメラのレンズを通して、こちらをまっすぐに見つめているように思えた。

「彰さん……！」

千紗の胸はときめいた。

南條彰は千紗の初恋の人だ。千紗より七歳年上で、千紗の家族がここへ越してくる前、近所に住んでいた。互いの母親同士が親しくしていたし、彼の父親も社長で共通点があり、家族ぐるみの付き合いをしていた。千紗たちがここへ転居した後も、一緒に旅行に行ったことがある。

少年だった頃の彰は優しく爽やかなお兄さんだったが、次第に千紗は彼を男性として意識するようになった。

だが、二年くらい前から疎遠になってしまっている。その彼がどうしてここへ来たのだろうか。

懐かしい気持ちもあるものの、今頃どうしてという思いもある。そうはいっても、無視するなんてとてもできない。千紗は緊張した声でインターフォンに出た。

「はい……」

千紗の声を聞いた途端、彰の表情が和らいだ。

『千紗？』

わたしの声を覚えていてくれたんだわ……！

一瞬だけ舞い上がったが、こちらの状況を彼はとづくに知っているはずだ。若い女の声がしたら千紗だと思うだろう。

「すぐ開けるから入ってきて」

千紗は電動の門扉を開くボタンを押した。そして、足早に階段を下りて玄関へと向かう。玄関の壁にかけてある鏡を覗くと、ふわふわしているセミロングの髪が少し乱れていたので、慌てて撫で

つけた。

茶色の髪だが染めているのではない。生まれつきこういう色なのだ。学生時代は友人に羨ましがられたものだが、千紗はまつすぐの黒髪に憧れていた。それでも、黒に染めたりストレートパーマをかける気にはまではならない。

白い肌もよく羨ましがられた。ただし、日に当たり過ぎるとすぐに赤くなるので、健康的な感じにはなれず、千紗はそれを残念に思っていた。

大きな瞳をしていて、可愛らしい顔だと友人は言ってくれるのだが、彰からすれば、ただの子供にしか見えないだろう。少なくとも二年前はそう思っていたようだった。

水色の大人っぽい雰囲気ワンピースを着ている今なら……？

いいえ。今更、なんの期待も抱けないわ。

身長が低いし、身体は細すぎる。出るべきところは出ているが、彰はきつと気がつかないだろう。それに、彼にはまだ忘れられない恋人がいるのだ。その恋人が亡くなってからも、彼はその人を探い続けているのだと彼の母親から聞いたことがある。

夢なんか見ている場合じゃないわ。そんな暇があるなら、仕事を探さなきゃ。

気持ちを切り替えて扉を開けると、広い門から入ってきた車が車寄せに停まる。すぐに彰が降りてきた。

彼は長身で、贅肉なんてひとつもないように均整の取れた身体つきをしていた。今日は日曜だからか、綿シャツにぴったりとしたジーンズというラフな格好をしている。そのせいで脚の長さか

はつきりと分かり、千紗はドキドキしてしまう。

素敵すぎて……

彰さんって、こんなに格好よかったかしら。

久しぶりに見る彼の姿は、千紗をときめかせた。彼が千紗を女性として意識していないことは分かっていたても、千紗のほうはそうではないのだ。

「こんにちは……彰さん。久しぶり」

千紗は照れくささを隠しながら挨拶をした。

彰は千紗の姿を見つめ、それから朗らかな笑顔になった。

「久しぶりだね。ああ、車は別のところに停めたほうがいいかな」

「そのままでもいいわよ」

どうせ誰も訪ねてこないし、我が家にはもう一台だって車はないのだ。

「父も母もいないんだけど……。二人とも夕方には帰ってくるから、どうぞ上がって」

「ありがとう」

彼は白い歯を見せて微笑んだ。彼の温かい眼差しを向けられ、千紗は何も考えられなくなりそうになる。

まったく、わたしったら……！

彼は初恋の人だが、それだけのことだ。相手にされないことが分かっているのに、二度目の恋になんて落ちたくない。

それに彼は自分に用事があつて来たわけではないはずだ。千紗は彼を客間に通して、お茶を淹れるためにキッチンへ向かった。

今まではお茶の用意さえ、いつも家政婦にしてもらっていたのだ。家政婦がいなくなつて初めて千紗は自分で淹れるようになった。

こんなレベルで、一人で生きていけるのだろうか。また不安になつてくるが、なんとかそれを振り払い、不器用な手つきで湯呑みにお茶を注ぐ。

「あつ……」

少し零してしまった。慌てて布巾で拭き取り、湯呑みを茶托に載せる。なんだか情けないけれど、ちよつとくらい失敗したつて、ちゃんと生きていけるはずだ。

千紗はそう思うことにして、これ以上零さないように気をつけながら、客間に運んだ。この部屋には大きなソファやテーブル、そして洋酒が並べてあるサイドボードなどがある。父が仕事に関係した客をもてなすために造られた部屋だ。

本当ならリビングで寛いでもらいたいんだけど……

家政婦がいらない今、あまり片付いていないのだ。この部屋だつてよく見ると、どこかに埃が溜まつているかもしれない。

彰はソファには座らず、窓際に立つて庭のほうを見ていた。

以前はきちんと手入れをされていた庭も、悲しいことに今は荒れている。剪定してくれる庭師はいつからかいなくなつていたし、家族の誰も水を撒く心の余裕もなかった。花は枯れ、雑草は伸び

放題になつている。

千紗は切ない気持ちになりながらも、懸命に明るい声を作つて彼に声をかけた。

「彰さん、お茶をどうぞ」

彼は振り向き、微笑んだ。

「ありがとう。君がお茶を淹れるなんて知らなかったな」

「何もできないと思つてた？ わたしだつて、いつまでも子供じゃないのよ」

本当は何もできないに等しい。一応、父の会社で働いていたから、自分はまだ立派な社会人だと思つていた。だが、彼からしたらやはりまだ子供なのだろう。

それでも、彰には少しでも大人の部分を見せたかった。いつまでも初恋を引きずっているのは馬鹿馬鹿しいことかもしれないが、一人前の女性として見てほしい気持ちはまだ残っている。

彼がソファに座つたので、千紗もその向かい側に腰を下ろした。なんだか変な気分だけれど、両親が帰つて来るまで、彼の相手をするべきだろう。

「今日は母に何か用事があるの？ 彰さんのお母様が何かおっしゃつたとか？」

「いや……そうじゃないんだ」

千紗は目をしばたかせた。それでは、彼は何をここにこへやつてきたのだろう。そういえば、彰と会うときは、いつも彼の母と一緒にだった。母親同士が会う時に一緒にやつてきていたのだ。一人でこの家に来たことも、今までなかったと思う。突然のことすぎて、状況がさっぱり分からない。

「えつと……じゃあ、父に何か？」

「実は、君と話がしたくて来たんだ」

意外なことを言われて、千紗は目を丸くする。

「わたしに？」

二年前から彰とは会っていない。まさか彼が自分に用事があるとは思いつかなかった。

彼は三年前に父親を亡くして、その父親が経営していた会社を継いだ。元々それなりの規模の会社だったが、彼の手腕によって大きく発展している。経営能力が高かったらしい彼は、今では相当な資産を持っているだろう。

彼とその家族とは長い間、付き合いがあった。けれども、生活環境が変わった今、これからも親しくできるかどうかは分からない。ましてしばらく会わなかった千紗に、一体なんの話があると言っただろう。

「正登君から、君が一人暮らしを始めるって聞いたが、本当なのか？」

どことなく非難めいた態度で尋ねられ、千紗は少しムツとする。一人暮らしすることは、決して悪いことではないはずだ。

「あなたと正登がそんな話をしてたなんて知らなかったわ」

「僕は正登君とはずっと連絡を取り合っていたんだよ。彼が家を出たいと言いつ出したときには相談に乗ったし、お父さんを説得してあげた」

「えっ……そうなの？」

それは初耳だ。正登が家を出て友人とルームシェアを始めたのは一年半前だったが、それに彰が

関わっていたなんて誰も教えてくれなかった。

子供っぽいかもしれないが、千紗はなんと面白くなかった。自分だけが除け者のように感じたのだ。もしかしたら、この二年間、千紗が彼に会わなかったのは、彼のほうが千紗を避けていたからだろうか。

「そんな……！」

二年前、千紗と彰は家族と一緒に、海辺のリゾートホテルに滞在した。あのときに起こったことで、千紗は彼への想いを新たにしていたのだ。そして、彼の気持ちも自分と同じだと思い込んだ。

だが、それはすぐに勘違いだと分かった。彼は、まだ亡くなった恋人のことを想っていたのだ。

苦々しい思い出だ。あのとき千紗は彼に自分の想いを打ち明けたりしなかったが、彼に気づかずにしまったのだ。だからこそ千紗から遠ざかっていたのだろう。

そう考えるのはとてもつらいし、恥ずかしい。

彰は千紗へまっすぐ視線を向けてきた。

「正登君はいい選択をしたと思うよ。彼は一人でも生きていける。しっかりした子だから」

「わたしもそう思うわ」

正登が一人でなんでもやるようになった頃、千紗は淋しい気持ちになったものだった。まるで置いてきぼりにされた気がしたのだ。一方で、姉として誇らしいとも思った。特に今はそう感じる。自分に弟のような強さがあれば、今の状況にもっと上手く対処できただろう。

「正登のことは何も心配ないわよ」

「そうだね。心配なのは君のほうだ」
思わず頷きかけて、千紗は彼を睨んだ。

「わたし、あなたに心配してもらうほど子供じゃないわ！ もう二十二なんだし」
「年齢は大人だ。でも、君は一人暮らしできるほど強くないと思う」

確かにそうだ。彼は憎らしいほどの確に千紗のことを把握している。凶星だが、なんとなくそれを素直に認める気にならない。

「で、でも、そうしなきゃいけないのよ。父と母は田舎に帰って人生をやり直すみたいだけど、わたしはこっちで頑張ることにしたの。いつまでも両親に頼ってはいけなくて……」

「それなら、君は今後についてどんな計画を立てているんだ？ 住むところはもう決めたのか？」
どうして彼はそこまで知りたがるのだろう。千紗は彼の前で中学生にでも戻ったような気がしていた。

千紗自身不安はあるものの、彼が心配するほどではないはずだ。実際、両親はあまり心配していない。もともと、両親には娘のことを気遣う余裕すらないのかもしれないが。

ともあれ、彰も千紗の計画を聞けば、気が済むに違いない。

「しばらくの間、友人のアパートに泊めてもらうの。それから仕事を探して……」

「それはよくないな」

「……どうして？」

彼はとても渋い顔をしている。どこがよくないのか千紗には分からなかった。

「もちろん、その友人というのは女性なんだね？」

千紗は頭にさっと血が上るのを感じた。

「あ、当たり前よ！」

二十二歳の女性なら、親しい男性がいてもおかしくない。けれども、彰への片想いを引きずっていたせいか、残念ながら千紗はまだ男性と付き合ったことがなかった。

すると、彰は何故だか笑顔になった。

「そうか。でも君の友人には恋人がいるかもしれない」

「……そうよ。ときどき、泊まりにくるって言ってたわ。そのときは、わたしは別の友人宅に行くか、カラオケとかで夜明かしして……」

「ダメだ！」

突然強い口調でそう言われて、千紗は驚いた。そんなふうには頭ごなしに否定されるとは思わなかったからだ。

子供の頃から知っていて、彼が千紗の兄のような気持ちでいることは知っている。だが、何も本当にそう振る舞うことはないのではないだろうか。

ムツとしたものの、「あなたにそんなことを言う権利なんかない」と千紗は突っぱねられなかった。心配してくれている彼を不愉快にさせたくなかったのだ。

二年も会わずにいたから、彼への気持ちは薄れていたつもりだった。

もう好きでもなんでもないと。あれはただの子供じみた初恋だったのだ、と。

でも、そうじゃなかった。

彰の顔を見るだけで、胸がときめいてしまう。彼の眼差しがまっすぐ自分に向けられているだけで、心が騒いでしまうのだ。

無論、彼は兄のような気持ちで、千紗を心配してくれているだけだ。それは間違いない。しばらく会わなかった彼が、再会した千紗に対して急に恋心を抱くことなんてあり得ない。千紗は夢見がちなどころもあるが、二年前の苦い思い出のせいで、彼に関してはとても現実的な考えを持っていた。

「どうしてダメなの？ よく分からないわ。友人には迷惑をかけてしまうけど、とても優しい人で、大丈夫だって言ってくれてるのよ」

「そうかもしれないが、そんなことでは君の生活が乱れてしまう。僕は心配なんだ……」

彼の表情は本当に心配してくれているように見える。千紗は頬を染めた。恋人にはなれなくても、関心を持っていてくれると思うと、やはり嬉しい。

「心配してくれるのはありがたいけど、他に方法はないもの。まず仕事がないし。お金だって、そんなに余裕がないわ」

今まで欲しいものは親が買ってくれていたので、千紗はもらったお年玉や小遣いをこつこつと貯めていた。給料もそうしていたが、我が家の家計が苦しくなってきたから、生活費のために大半を使ってしまった。

だが、そんなことをいちいち彰に説明する気にはなれなかった。貯金が少ない理由を言わなければ

ば、彼は千紗のことを、お金にだらしなと思うかもしれない。けれど、両親が娘の貯金に頼らなければならぬほど惨めな状態にあるとは知られたくなかった。

もともと、彼も会社を経営しているのだ。父がどんな状態にあるのかくらい、とつくに知っているだろう。

彼はいきなり立ち上がると、千紗の隣に腰を下ろした。そして、千紗の肩に手を回し、顔を覗き込んできた。彼の顔があまりにも近くにあり、ドキッとす。

「千紗……僕は君を妹のように思っているんだよ」

その言葉に胸が痛む。

「……分かっているわ。いつもそう言ってくれていたから……」

千紗のほうは違う。彰もそれを分かっているはずだろうに。

「だから、他の方法があると言いたんだ。君は居心地のいいマンションで暮らせる。友達に迷惑をかける必要はないんだ」

「どういうこと？ あなたが格安の物件を知っているとか？」

「ああ」

「でも、先に仕事を見つけないと。家賃が安くても、生活するにはお金がかかるわ」

「家賃も食費も光熱費もタダだ。僕のマンションに居候すればいいんだから」

千紗はすぐには反応できなかった。彼の言ったことが頭にきちんとしてくるまで、時間がかかったからだ。

だつて……信じられないわ!

確か彼は一人暮らしをしているはずだ。そのマンションに、わたしと一緒に住もうって言ってくれているの?

大好きな彰さんと一緒に暮らすなんて……

千紗の頭の中で、甘い新婚生活みたいな夢が一気に広がった。

朝起きて、おはようと言ってキスをするの。それから、わたしは真っ白なエプロンをつけて、キッチンで朝食を作るのよ。そうしたら、彰さんがおいしいって言ってくれて……

だが、そんなことを考えたのは一瞬だけで、すぐに現実に立ち戻った。

いいえ。彼は別に結婚しようと言ってるわけじゃないわ。

もちろん同棲どうせでもない。妹のような千紗を自分のマンションに住まわせると言っているだけだ。しかもその理由は、千紗の生活が乱れることが心配だから。きつとこのままでは夜遊びをするようになるでも思われているのだろう。

「あの……それはちよつと無理だと思ふわ……」

「何故だい?」

彼は真剣な眼差まなざしで尋ねてきた。彼の顔はまだ千紗の顔の近くにある。すぐにでもキスができそうな距離だが、そんなロマンティックなことが起きるわけがなかった。

「やっぱり……ほら、両親が心配するわ。男の人と一緒に住むなんて……」

千紗がそう言うと、彼はクスツと笑った。

「確かに。だが、秘密にしていればいいだろう?」

「秘密……?」

まさか彼がそんなことをそそのかすとは思わなかった。秘密と言えば聞こえはいいが、要は嘘をつくということなのだ。いつも真面目な彼らしくない。

「いや、冗談だよ。僕は兄妹みたいなものなんだ。だから心配ない。君のご両親には僕からちゃんと言っておくよ。それに、別にずっと僕のマンションにいる必要はない。君がきちんと仕事に就いて、一人暮らしできるようにしたら、改めて住むところを探せばいい」

彼はそう言って、にっこり笑った。千紗はその笑顔に見蕩みとれて、思わず頷うなずいてしまうところだった。

「でも、いくら子供の頃からあなたを知っているにしても……住むところや食べるものをお世話になるなんて、図々ずうずうしいような気がするわ。だつて兄妹みたくても、本当に血が繋がつながっているわけじゃないし」

もちろん友人というわけでもない。小さい頃から知っていても、しばらく会わなかったのだ。もはや単なる知り合いと言つてもいいくらいだ。その彼のマンションに転がり込むなんて、やはり図々ずうずうしいと思えない。

「一時的なことなんだから気にしなくていい。僕は君を安全なところに置いておきたいんだ。変なことに巻き込まれてほしくない。君は世間の暮らしを何も知らないから……」

確かにそうだ。社会人とはいっても、真綿で包むように甘やかされてきた。家事どころか、一般

常識に少し欠けるところがあるのは、自分でも分かっている。友人だって今は歓迎してくれているが、一緒に暮らすうちにきつと何もできない千紗に苛立いらだってしまうだろう。

でも、それは彰さんだって、同じなんじゃないかしら。

千紗は彰に嫌われたくなかった。もちろん誰にも嫌われたくはないが、特に彰には嫌われたくない。

そんな不安が表情に表れていたのか、彰はふつと微笑ほほえんで、千紗の頬にそつと手を触ふれてきた。そして、ゆつくりと撫なでていく。

千紗の胸が、彼に聞こえてしまいそうなほど高鳴る。

「君は何も心配しなくていいんだよ。僕がいいようにしてあげるから」

それはとても甘い言葉で、千紗はうっとりした。だが、すぐに我に返る。そんなふうに甘やかされてきたから、自分はいつまでも何もできないままなのだ。

わたしはもつと強くならなくちゃいけないのに。

そうよ。彰さんに呆あきれられても、自分を変えるためには頑張らなくちゃ！

「ダメよ。あなたにそこまでお世話にはなれないわ」

彼は眉をひそめた。

「それなら、最初の計画どおりにするつもりなのか？」

千紗が首を横に振ると、彼はほつとした表情になる。

「じゃあ、僕のマンションで暮らすんだね？」

「本当にあなたさえよければ。でも、ひとつだけ頼みがあるの」

「……頼みって？」

彼は警戒するみたいな口ぶりで尋ねてきた。千紗は彼を安心させるように、にっこりと笑った。

「あなたのお世話になっても、今のわたしは何もお返しができないわ。だから、せめてあなたのおメイドとして働かせて！」

彼は啞然あぜんとした顔で千紗を見つめた。

「メイドだって？」

「家政婦ってことよ。もし、もうあなたのところにいるなら別だけど」

「いや、いないよ。自分のことは自分でやっている。食事はほとんど外食だし、一人暮らしだから掃除も簡単だ。洗濯もそう難しいことじゃない。だが、もし君がやってくれるというのであれば、もちろん嬉しいよ」

彼の瞳は輝いている。本当に嬉しいと思ってくれているようだ。千紗も嬉しかった。家政婦ということであれば、居候いこうしていても心苦しくない。それに、これから自分に必要なものも身につけられるのではないだろうか。

つまり、家事の仕方や一般常識というものを。

「ただし、あまり上手くはないのよ。掃除や洗濯は……。でも、お料理なら少しできるわ！」

今は自信を持ってできると断言できないが、やってみればなんとかなるだろう。それに、書店に行けば料理の本が売っている。インターネットにだってレシピがたくさんあるはずだ。ひよつとし

たら掃除や洗濯の仕方もどこかに書いてあるかもしれない。

だとしたら、何も怖くないわ！ わたし、立派なメイドになるから！

住むところを提供してもらおうお礼もあるが、彼のために家事をすることを想像すると、嬉しくなってきた。きっと彼の妻になったような気がするに違いない。

彼は優しくな眼差しで、千紗を見つめている。

「今までとは違う暮らしをしなくてはならないことで、君は落ち込んでいると思ったよ。ひよっとしたら泣いているかもしれないって。だけど、君は昔と比べて、少し変わったんだな」

以前の自分は、それほど幼く見えていたのだろうか。そう考えると情けないが、大人になったところを、これから彼に見せていけばいい。一緒に暮らせば、彼にもそれが分かるはずだ。

「確かにちよつと落ち込んでいたけど……。でも、もう大丈夫よ。両親も弟もそれぞれ自分達の進む道を見つけたんだから、わたしも頑張るわ！」

当面はあなたのメイドとして。

一緒に暮らしていけば、彼の心を捉えられるとは期待していない。そんなさもない考えで、同居やメイドのことを決めたのではなかった。

どのみち、彼の心には別の人が住んでいるのだから……

それは彰が数年前に亡くした恋人。きっと今もその恋を引きずっているのではないだろうか。

だから、千紗は『妹』として一緒に住み、『メイド』として働いただけだ。

そう。他に何も期待していないわ。

「いつこの家から出ていく予定なんだ？」

「今日よ。父と母が帰ってきてから出ていこうと思っていたの。二人が田舎に戻るときには、見送りに行くけど」

「ご両親が帰られるのは夕方だったか。それなら先に僕の部屋に案内しようか。僕がご両親に話をするから、また一緒にここに戻ってこよう。荷造りはできた？」

「ええ、あんまり持っていけないからスーツケースに。でも、本当に居候いこうさせてもらってもいいの？ もし、わたしが邪魔になるときはちゃんと行ってね。そうしたら何か方法を考えるから……」

彼は優しく微笑ほほえんだ。

「君は決して邪魔にはならないよ」

果たして本当だろうか。

男性の場合、心と身体が別だという話を、何かで読んだことがある。彼の心はずっと別の人のものだが、誰かと付き合っているかもしれない。

彼の交際相手を見るのはつらい。千紗はそんな場面を想像して、心を痛めた。

万が一、交際相手がいたとしても、千紗が居候していることを知られたくないだろうから、自宅に連れてくることはないかもしれない。いや、そうであってほしい。それに彼の言うとおり、これは一時的な同居なのだ。そんなに深刻に考えることもないだろう。

仕事が見つかるまで、どのくらい日数がかかるか分からないけれど……

とにかく、少しの間、押しかけメイドとして家事の修業をしていれば、やがてすべてが上手くい

く。今抱えている不安もそのうちに消えていくだろう。生活を立て直す機会を与えてくれた彼に感謝しなくては。

「じゃあスーツケースを取ってくるわね。少し待っていて」

千紗は明るく彼に言うと言席を立ち、二階の自分の部屋に向かった。

彰は千紗の後ろ姿が扉の向こうに消えたのを見て、ほっと息を吐いた。

上手くいった……！

正登に会ったとき、彼は若干浮世離れしているところのある姉を心配していた。

『一人暮らしなんて、できっこないと思うんです！ 仕事もなくなっただから、親と一緒に田舎に帰ればいいのに。どうしてここに残ろうなんて考えたんだか……』

正登はすでに小学生のときに、自分の家庭と友人のそれが違うことに気づいていたという。姉がふわふわとした人生を歩んでいるのを見て、自分はそれではいけないと感じたそうだ。そこで、早くから自立できるように、いろんなことを考えていたらしい。

それに比べて、千紗は両親の言いなりだった。ただ、彼女の両親は娘を溺愛てんあひしていたものの、甘やかしてばかりではなかった。躰しんはちゃんとされているし、礼儀も心得ている。自分本位の我がままなお嬢様ではないし、贅沢ぜいたくをしているわけでもない。しかし過保護にされるあまり、一人では生

きていけなさそうな人間に育ってしまったのだ。

いや、さすがにそれは言い過ぎだろうか。彼女も一応、社会人だ。弟の目から見ても頼りないようだけれど。

彰は、先ほどまでの千紗とのやりとりを思い出した。

くるくる変わる彼女の表情を見ると、思わず抱き締めて慰めなぐさたくなってくる。

もちろん『兄』として抱き締めるだけだ。自分で彼女にそう言ってしまったのだから、そうするしかない。

母親同士が友人だったから、彼女のことは赤ん坊の頃から知っている。よちよち歩くようになり、それからおしゃまな女の子になった。そして、元気な小学生から年頃の中高生になり、やがて彼女は大人になった。

ずっと彼女を小さな妹のように思っていた。だが二年前の夏、彼女が水着姿になったのを見たとき、もう子供ではないことに気づいた。いや、正確にはその前から気がついていたので。ただ認めたくなかっただけだ。

自分がまた恋をしていることに。

彰は今の千紗と同じ年齢の頃に大恋愛をした。そのときの恋人を事故で亡くして以来、女性に心を動かされることはなかった。傷つきすぎて、誰かを再び愛するなんて冒険をもうしたくなかったからだ。

しかし、いつしか千紗の大きな瞳を見る度に、心がときめくようになっていた。彼女は華奢かしゃで、

精神的にも頼りない感じがするが、他人の心に敏感なところがある。そして、人の心を癒やすような振る舞いをごく自然にする。

恋人が亡くなった頃、彼女のそんなところを知って何度も感謝した。少女だった彼女が成長して初々しい女性に変わったとき、彰は彼女への気持ちに気づいたのだった。

ただ、あのときはまだ彼女と付き合うことはできなかった。

完全に心の痛みが消えていなかったこともあったし、仕事も大変だった。それに彼女は二十歳の学生だ。未来を自分に結びつけてしまうには、彼女はまだ若すぎた。

手を出さないためには、距離を置くしかない。それでも、気になるときは、母を通して彼女の情報を入手した。何より正登というスパイがいた。

とにかく、彼女に一人暮らしなどしてもらいたくない。もちろん、自立できそうなくらいに成長すれば別だが、今の彼女には誰か手を貸す必要がある。

誰かが彼女をしつかりした大人になるように導かなくてはならない。だが、彼女が同居するはずだった友人がそこまでしてくれるとは思わない。それは彼女を愛する人間だけができることだからだ。

彰は千紗を守りたかった。これまでは彼女の両親がその役目をしていたが、今からは自分がする。ただし、彼女の親とは違ったやり方で。

千紗の一生を考えると、甘やかすことはしたくない。どこか浮世離れしているところは好きだが、

やはりそれでは生きづらいだろう。もう少し現実を知ってもらわなくてはならないと思いつつ、危険からは守りたい。

だから、僕のマンションに彼女を住まわせる。不埒な目的ではない。いずれは彼女を口説きたい気持ちもあるし、恋人にしたい。その先のことまで考えているが、当面は彼女を成長させるつもりだった。

ある意味、騷しつけというやつだ。押しかけメイドか……

実を言えば、彰も千紗をそんなふうに住まわすに仕立て上げようと思っていた。せめて身の回りのことくらいはできるようになってほしい。料理はできると言っていたが、正直それも怪しいと思っていた。

家政婦がいたということもあるが、千紗の母親は彼女を溺愛するあまり、何もさせようとしなかった。あれだけ贅沢ぜいたくに暮らしていれば、何もできなくて当たり前かもしれないが、今となっては誰も千紗を守ってはくれないのだ。

それに……

やはり、他の男に千紗を取られることだけは避けたい。大人になってほしかったが、一人暮らしをしている間に、彼女に恋人ができるかもしれない。もちろん人の心を自由に操れるわけではないので、彼女が恋をしたら止められない。

けれども誰よりも彼女の傍そばにいれば、それが避けられる可能性が高くなる。彼女が自分を男として好きにならなかったとしても、ろくでなしの男に騙だまされないようにすることはできる。

押しかけメイドの恋人

彰はこれから千紗と暮らすかと思うと、気分が高揚してくるのを感じた。だが、まずは『兄』として彼女に優しくしよう。

二人の未来はそこから始まるのだ。

彰は彼女が置きっぱなしにしていたお茶を飲み干すと、湯呑みをキッチンまで持っていき、洗った。すると、階段のところからものすごい音が聞こえてきて、彰は慌てて駆け出した。

「千紗！ 大丈夫か？」

てっきり彼女が階段から落ちたと思い、真っ青になった。だが、落ちていたのは大きなスーツケースだった。

「ごめんなさい、彰さん。ビックリさせちゃって」

見上げると、彼女はもうひとつのスーツケースを持って、階段を下りようとしていた。

「待て！ 動くな！」

彰は彼女に鋭い声をかけると、急いで階段を上った。そして、彼女の手からスーツケースを奪う。「こんな大きな荷物だとは思っていなかった。ごめん。僕が気づけばよかったのに」

「え……いいの。彰さんのせいじゃないし。だって元々、一人でこれを友人のアパートまで運ぶ予定だったんだもの」

冗談ではない。スーツケースだけならいいが、千紗まで転がったらどうするのだ。彰は想像してみてもっとした。

「こういうことは無理して一人でやろうとしなくていいんだ。僕達はこれから一緒に暮らすんだか

ら、遠慮はしないで」

まるでこれから同棲するかのようになってしまい、彰は内心慌てた。彼女を警戒させたくない。

そう思いながらも、彰の心は彼女と暮らすことで頭がいっぱいになっていた。

彼女のほうは頬を赤らめているだけで、嫌がっているようには見えない。

「あ、ありがと……。わたしにできることなら、なんでもするから……彰さんも遠慮せずになんでも言ってみてね」

頭の中に不埒なことが浮かんだが慌てて打ち消す。誘惑するために彼女と同居するわけではない。いずれはそうなるにしても、まだ早い。

早く大人になってくれ……

それが彰の願いだった。

千紗は彰の部屋に足を踏み入れて、目を瞠った。

彰の部屋は富裕層を対象にしているマンションの高層階にあった。都会的な雰囲気、とても洗練されている。広いリビングに白や黒を基調としたスタイリッシュな家具が置いてあり、綺麗だけれども温かみは少なく、千紗は戸惑った。彼がどんなところに住んでいるのか、はつきりとしたイメージを持っていたわけではないが、一人暮らしなのだから、もう少し乱雑な感じなのかと思っ

いたのだ。

そう。生活感があるような……

この部屋のインテリアは彼が決めたのかしら。

そして、掃除も彼がしているのだとしたら、千紗の出る幕はない気がする。もちろん自分で言い出したのだから、ここでメイドとして家事をするつもりではいるが、果たして自分の力など彼に必要なのだろうか。

いろいろ疑問だわ……

「綺麗なお部屋ね。彰さんがこういう雰囲気のお部屋で暮らしているなんて思わなかった」

彼はクスツと笑う。

「高校生の頃の僕の部屋を想像していたからじゃないか？」

彰が近所に住んでいた頃は何度も家に遊びにいき、彼の部屋にも自由に出入りしていたことがある。確かにあのときの部屋はずいぶん乱雑だった。

「彰さんも大人になったのねえ」

千紗がしみじみそう言うと、彼は嘖き出した。

「それは僕のセリフだ。さあ、こっちが君の部屋だよ」

彼がスーツケースを持って、奥の部屋へと入っていく。そこはベッドとソファとテーブルと小さな整理ダンスがあるだけの簡素な部屋だった。なんだかビジネスホテルのように思えるが、居候の身で文句は言えない。

「泊まり客用の寝室だけど、まだ誰も使っていないんだ。飾り気がないから、君の好きなようにしていいよ。たとえば絵をかけるとか……。君の家から何か飾るものを持つてくるといい」

「え……でも、一時的にここで暮らすだけだから……」

「そんな遠慮はいらない。君は僕のメイドになつてくれるだろうか？」

「住み込みのメイドが図々しくなつてもいいの？」

「その代わり、こき使われることになるかもね」

彼は千紗に気を遣わせないように、そう言つてくれているのだろう。これから本当に彼のためになることをしたい。迷惑をかけるなんて絶対にはいけない。努力して、ちゃんとしたメイドになれるようにしよう。

千紗は自分の心に誓つた。

「クローゼットには何も入れてないから、自由に使つてくれ。何か必要なものがあつたら、なんでも言つてほしい。たとえばエプロンなんか……持つてないんじゃないかな？」

千紗は顔を赤らめた。エプロンは学校の調理実習以来つけたことはないし、もちろん今回の荷物には入つていなかった。

「ごめんなさい」

「謝ることはないよ。君に似合いそうなものを、僕がプレゼントしてあげよう」

「そんな……。エプロンくらい自分で買えるわ」

こんないい部屋に居候させてもらえるだけでもありがたい。食費なども気にしなくてもいいのだ。

それなのに、これ以上、彼に何かしてもらうわけにはいかない。次は自分が働いて返す番だ。

彼はふっと微笑んだ。

「それこそ『エプロンくらい』だ。君は自分の力でこれから歩き出そうとしている。その一步を記念してプレゼントするんだ。メイドの制服だと思えばいい」

「制服ね……。分かったわ」

千紗の頭に浮かんだのは、メイド喫茶で働くメイド達の制服だ。実際にそんな格好をするわけではないが、本当にメイドになりきっている自分を想像すると、おかしくなってくる。

「何がおかしいんだ？」

急に笑い出した千紗を見て、彰は眉をひそめる。

「わたしがヒラヒラのメイド服を着て、彰さんに『お帰りなさいませ、ご主人様』って言うてるところを想像したの」

彼もまたそれを思い描いたのか、笑い出した。

「いいね。似合うと思うよ。君が着たら可愛いだろうな」

もちろん、それは冗談だろう。可愛いなんて言われて舞い上がってはいけない。

そう思いつつも、千紗はやはり嬉しかった。

「わたし、これから頑張るわ！ なるべく早く早く仕事も見つけるから」

「そんなに急がないほうがいい。今までお父さんの会社で働いていたんだらう？ どんな仕事をしていたんだ？」

「受付よ」

研修中にいろんな部署で働いたものの、最終的に受付に回された。受付は二人で、もう一人は女優並みのすごい美人だったので、千紗はずっと自分がおまけのような気がしていた。美貌の代わり

に愛想でカバーしていたつもりだが、会社の訪問客はどう思っていたらう。

「それは君がやりたい仕事だった？ 仕事は楽しかった？」

千紗はぼかんとした。

仕事を楽しいなんて一度も思ったことはない。単に与えられた業務をこなしていただけだ。そもそも自分がやりたいことなんて、考えたこともない。

「わたし……その……やりたいことなんてないし……」

千紗はしどろもどろ答えた。

彰は顔をしかめているのを見ると、恐らくそれは悪いことなのだろう。

「ごめんさい……」

「いや、謝らなくてもいい。やりたい仕事がない人は大勢いるし、目指すものがあつたとしても、みんながその仕事に就けるわけでもない。だけど僕は、君に落ち着いて考えてほしいんだ。自分がどんな人生を送りたいのか。どんな仕事をしたいのか。どんな夢があるのか。小さいことでもいいんだ。何か見つけて、それを叶えるために努力をしてほしい」

千紗は真剣な眼差しをしている彰を見つめた。

こんなことを言われたのは初めて……

これまでの千紗は、両親の言うことにすべて従ってきた。大切なことは全部、親が考えてくれる。千紗はそれに沿って生きてきた。そして、それでいいのだと、今まで思ってたのだ。

自立しようと思ったのも親のためだ。もちろん自分自身のためでもあるが、親にはもう迷惑をかけられないと考えたからだ。

だけど……

わたしはもっと大事なことを忘れていたんじゃないかしら。

働いて、一人暮らしをして……それから先のことはまったく考えていなかった。誰かに出会って、恋をして、結婚して、子供を産む。そんなことをぼんやり想像したことはあったが、それはあまりにも漠然とした夢でしかなかった。それに、その夢は必ず成し遂げたいと思ってるものでもない。「わ、わたし……働いて、お金をもらうことしか考えてなかった……」

「お金を稼ぐために、それから生きるために働く。それも正しいと思うよ。家族を養うために働くのも。でも君は若いんだ。ここにいる間、自分が何をしたいのか考えてみないか？ 僕のメイドをしながら……」

彰は最後に付け足した言葉で、千紗を和ませてくれた。

彼は千紗に心の余裕を与えるために、このマンションで暮らそうと誘ってくれたのだ。友人のアパートに居候したら、いつまでも厄介になるわけにはいかないので、焦ってなんでもいいから仕事欲しいと思うようになっていただろう。だが、ここではそうしなくてもいいと、彼は言っている。

千紗は彼に感謝した。それと同時に、ますます彼のことが好きになってしまった。

だって、こんなにもわたしのことを気遣ってくれる人は他にいないわ。

彼にとつて千紗はまだ『妹』なのだろう。『妹』だから、身内に対するような心配をしてくれる。だけど、それでもいい。

しばらくの間、彼の傍にいられる。彼と一緒に暮らせる。

大好きな彼と。

「ありがとう。最初は家事に慣れなくちゃいけないし、その間じっくり考えてみるから」

家事も一人暮らしのためには重要なものだ。しばらくここで暮らせば、自分はきつと自立できるだろう。

「君はとても素直なんだね……」

彰に褒められて、千紗は顔を赤らめた。頬がひどく火照っている。両手でそれを押さえて、千紗はうつむいた。

「素直だなんて……。ただ、彰さんの言うことが正しいって思ったから。わたし、ずっとふわふわと漂って生きてきたの。なんの苦労もしていないし、何も考えてなかった。だけど父の会社が倒産したとき、今までどおりでいられないし、いちゃいけないんだって思ってた……。でも、わたしはなんにもできないし……」

「大丈夫だよ」

ふわりと彼の腕が千紗の身体に回される。気がつくまで千紗は彼の腕の中にいた。

千紗は驚いて彼を見上げた。彼はとても優しい眼差しで千紗を見つめている。そんなふうに見られていることが嬉しくてならないが、それ以上に身体が触れ合っていることを意識してしまい、ドキドキしてくる。

これは『兄の抱擁』なのよ……

そう思いつつも、眩暈がしそうなほど大きな喜びが湧き上がってくるのを抑えられなかった。

「君ならちゃんとやれると信じているから」

彼の言葉に、更に頬が熱くなる。

やだ。何も考えられなくなりそう。

千紗はただ彼の目を見つめていた。

「あ、ありがとう……。わたし、頑張るから」

彰は微笑むと、顔を近づけてきた。

一瞬だけ唇が触れ合い、千紗は驚いた。

だって、これは……キスよね？

二年前の夏のことを、千紗は思い出した。彼と千紗が家族と一緒に海辺のリゾートホテルに滞在したとき、みんなで海水浴へ行ったのだ。そこで千紗は脚がつって溺れかけ、彰に助けられた。

水着姿でしがみつき、彼もまたしっかりと千紗を抱き締めていた。浜辺まで連れてきてもらったものの、気を失いかけた千紗は人工呼吸される寸前で目を開けた。そして間近で彼の瞳を見つめたとき、二人の間に何かが起こったような気がしたのだ。

千紗はこの瞬間、彼への憧れが恋に変わるのを感じた。

そして彼の眼差しにも、情熱みたいなものが込められていると思った。目を合わせたまま顔を近づけられた千紗は、キスをされると思い、ドキドキしながら彼の唇が重なるのを待った。

だけど、それは勘違いだった。

彼はすぐにはとっとしたように顔を背け、千紗を窘めた。準備運動が足りないから溺れるのだと。

千紗は震える声で助けてくれた礼を言ったが、無視された。

あのとき千紗は彰に嫌われたと思った。千紗がキスを待っていたのに彼は気づいて嫌悪感を持ったのだと。千紗は想いを告げることなく失恋した。

あれから、彼は千紗と顔を合わせるのを避けていたみたいだ。そして彼の母親から、彰が亡き恋人をまだ想っていると聞いた。それならやはり、自分など出る幕はない。だから、二年の間、ずっと千紗は彼への想いを封印してきた。

でも……

今この瞬間、千紗は浜辺で助けられたときと同じような気持ちになった。

だが今のは人工呼吸ではない。紛れもなくキスだ。しかもあのときと違い、彼は本当に唇を合わせてきたのだ。

そう。キスよ……！

でも、どうして彰さんがわたしにキスをしたの？

千紗は初めてのキスに戸惑った。

もちろん嬉しい。だけど、あまりにも突然だったから、どういう反応をしていいかも分からない。それに一瞬、唇が重ねられただけだから、なんだか今のが本当のキスなのかどうか、判断できなくなっていた。

彰は微笑むと千紗の身体から手を離れた。

「さあ荷物を片づけて。ご両親に話をしなくちゃいけないから、また君の家に戻るよ」

そう言っただけで何もなかったかのように、彼は部屋を出ていった。残された千紗は狐につままれたような気分になり、少しの間そこに立ち尽くしていた。

あれは……幻だったのかしら。

そんなはずはない。確かに唇が触れる感触があった。しかし外国でなら、挨拶みたいなキスだろう。そうよ。彼が本気でキスしたはずがないわ。

本気なら、あんなふうに平然と振る舞えるはずがない。これは弱気になった自分への励ましのキスに違いない。

彰が誰にでもこんなことをするとは思わない。きっと彼の目には千紗がまだ小さい子供みたいに映っているのかもしれない。あれもまた『兄』としての行動なのだろう。

でも、もしかしたら……？

ほんの少しでも、彰さんがわたしのことを好きになってくれたら……

希望を持つてはいけないだろうか。メイドとして彼に尽くし、きちんと自立できるようにになったら、彼に認めてもらえるかもしれない。女性として好きになってももらえる日が来ないとも限らない。

一緒に暮らしていれば、きっとチャンスはある。

よし。頑張ろう！

早速、千紗は荷解きにかかった。

2

荷物を片づけた後、彰は何がどこにあるのか、丁寧に説明してくれた。掃除用具が置いてある場所やその使い方までもだ。常温でストックしてある食材の置き場所や調理道具の説明もしてもらった。うちに、千紗は不安よりやる気が出てきた。

それから、彰は千紗の実家に連れて行ってくれた。

千紗が彰のマンションに居候することに對して、両親は驚いていたが、反対はしなかった。

それどころか、友人のアパートより彰のマンションで暮らすほうが安心だと考えたようだった。

でも、どうして……？

女同士で住むほうが普通は安全と思うものではないだろうか。それほど彰は信用されているのか。それとも、やはり兄妹のように思われているのかもしれない。

小さい頃から知っている、そういうものなのかしら。

父も母も千紗の気持ちを知らないから、そんなふうに思えるのではないだろうか。初恋のことは

ずっと胸に秘めていた。まして今も彼のことが好きだなんて、誰にも分かるはずがない。

まあ……いいわ。

両親に許しをもらって、千紗はすっきりした。これで胸を張って彰のマンションで押しかけメイドとして過ごすことができるのだ。

それから四人で近所の気取らないレストランで夕食を摂った。そんなわけで、メイド一日目はほぼ何もせずに終わった。

彰のマンションに戻ると、彼は仕事があるからと書斎にこもった。その間に千紗はバスルームを使わせてもらうことにした。さっぱりした後、髪を乾かしたが、彼はまだ書斎にこもっているみただった。

千紗は遠慮がちに風呂が空いたことを知らせて自分の部屋に入った。

なんだか落ち着かない……

初めて泊まる場所だから、それも当たり前かもしれない。しかし千紗が落ち着かないのは、別の理由があるからだ。

部屋は別だが好きな人が傍にいると思うとドキドキしてくる。

馬鹿みたいだ。彰のほうはなんとも思っていないはずだ。その証拠に、彼は書斎にこもって仕事をしている。それは平常心でいるということなのだ。

整理ダンスの上には、カエルのぬいぐるみが座っている。彰はこれをプレゼントしてくれたときのことを覚えているだろうか。

千紗が小学校の一年生のときのこと。二家族で温泉旅館に出かけたとき、設置されていたクレールゲームの前でぬいぐるみを覗き込んでいた千紗を見て、彰が声をかけてくれた。

『どれが欲しい？』

千紗はにっこり笑って、指差した。

『これ』

『見てるんだよ。ちゃんと取ってあげるから』

彰は言ったとおりに、カエルのぬいぐるみを取ってくれた。あの頃から彰は千紗にとって、なんでもできるヒーローだった。

千紗はずいぶんくたびれたそれを手に取った。捨てるべきかもしれないが、ずっと捨てられなかった。

わたしはこんなにも彰さんのことが好きなのに……

カエルを抱いたままベッドで寝転ぶ。なんだか疲れた。荷造りや荷解きはしたが、大した量でもなかったはずだけれど。

彰が書斎から出てきたら、おやすみの挨拶をしよう。そう思っていたのに、千紗はいつの間にか寝入ってしまった。

彰が部屋に入ってきて、千紗の寝顔とカエルを見て微笑んだのも知らずに。

千紗はカーテンの隙間から入ってくる日の光に気づいて飛び起きた。

目覚まし時計を見ると、もうとつくに起きていなくてはならない時間になっていた。どうしてきちんとセットしておかなかったのだろう。それとも自分で止めたのだろうか。

昨夜のことを思い返すと、目覚ましをかけるどころか、何もしないうちに眠ってしまったことに気がついた。

「おやすみの挨拶をしようと思ってたのに……！」

千紗は慌てて着替えて、部屋を飛び出した。彰は何時に会社に出かけるのだろう。そういえば、まだ聞いていなかった。朝食に何を食べるのかも知らない。

千紗はいつも朝食にパンを食べているので、フライドエッグやベーコンくらいは焼けるから大丈夫と思っていたが、彰もそうとは限らない。ちゃんと聞いておくべきだった。メイドとして初日から大失敗だ。

千紗は彼の寝室のドアをノックして、開いた。

「彰さん！ 起きてる？」

部屋に足を踏み入れようとして、千紗はそのまま固まってしまった。

彼はちよど着替えているところで、ズボンを穿いていたが、上半身は裸だった。水着をつけている彼を見たことがあるものの、いきなり引き締まった身体を見てしまい、千紗は動揺する。顔を真っ赤にしながら視線を逸らした。

「あの……ごめんなさいっ。わたし、寝坊してしまって……！」

「大丈夫だよ。おはよう、千紗」

彰は近づいてきて、昨夜のように千紗を一瞬抱き締めてキスをした。

これも挨拶のキスなの？

彼は平然とした顔でシャツを着て、ボタンを留めている。思わず千紗は見蕩れてしまったが、ふと我に返った。ボンヤリしている場合ではないのだ。

「彰さん、朝食には何を食べるの？」

「普段はパンだよ。でも今日はいいから。自分の分だけ作るといい」

「え、でも……」

彼は財布から一万円札を数枚出して、千紗に手渡した。

「冷蔵庫を覗いて、必要な食材を買ってきてくれ。近くにスーパーがあったのを覚えている？ 日用品もここから払って。足りなくなったらちゃんと言うんだよ」

なんだかまるつきり子供扱いされているようだ。千紗は情けなくなっていたが、実際、自分のレベルはそれくらいなのだろう。大人として扱われたかったら、家事をきちんとやれるようにならなくてはいけない。

彰は素早く身支度を済ませると、ブリーフェースを掴んだ。千紗がスーツ姿の彰を見たのは初めてだ。ネクタイを締めたところは普段着姿よりずっと格好いいと思った。だが、今はそれをゆつくり鑑賞する暇もなかった。

「ごめんなさい。わたしが寝坊しなかったら朝食も食べられたのに」

「気にしないでいい。僕も昨夜はなんだか眠れなくて。明け方に寝たから、寝過ぎしたんだ。いつ

もはこんな急がなくてもいいけど、今日は大事な会議があるからね」

彼は玄関前まで見送りにきた千紗を引き寄せ、また軽く唇を合わせた。外国人ではあるまいし、どうして彼はそんなに頻繁に挨拶のキスをするのだろう。恋人同士なら分かるが、決してそんな関係ではない。

けれども千紗は彼のキスが嬉しかった。彼の意図は分からないが、キスされると胸がときめく。たとえそれが大した意味も持たないことであつてもだ。

彰は謎めいた微笑みを見せて、千紗の頬を撫でた。

「それじゃ、なるべく早く帰ってくるから」

「い、行つてらっしゃい。気をつけてね」

千紗は明るく笑顔で送り出した。メイドの最低限の仕事だ。

それにしても、予定では早起きしてちゃんと朝食を作り、彼を起こしにいかうと思つていたのに。全部だめだった。

「もう、わたしつてば……」

自己嫌悪に陥りそうになつたが、なんとか押し止める。暗くなつてもいいことはない。受付の仕事をしていたときも、笑顔だけは絶やさなかつた。それ以外に取り柄がなかつたのもあるが、明るく笑うだけで、相手が和むことがあるのだ。

ボランティアで子供の相手をしていたときも、それですぐに仲良くなることができた。

笑顔つて、魔法みたいなもの。

これからも千紗はその魔法を使うつもりだ。

改めて顔を洗つて髪を整えた後、キッチンへ行く。彰に何も食べさせないまま送り出したことへの罪悪感が、まだ残つている。その代わり、やるべきことをきちんとしよう。

千紗がまつさきに考えたのは、夕食を準備することだった。

家政婦を雇えなくなつた後、母が料理をするようになり、千紗もいくらか手伝つた。下手ではあるが、まるつきり何もできないわけではない。まずは自分が作れそうなレシピをインターネット調べよう。そこに載つているとおり、材料を買い揃へばいいのだ。

とりあえず食事だ。食パンを取り出してトースターに入れる。次にコーヒーメーカーをセットした。これくらいは千紗にも楽にできることだ。もつとも、どちらも家政婦がいなくなつてから覚えたことだが。

パンとコーヒーだけの朝食は健康によくないだろう。そう思いつつも、自分のためだけに料理する気にはなれなかつた。

冷蔵庫からバターを取り出して、トーストに塗る。コーヒーと一緒にそれを食べて、千紗はなんとなく溜息をついた。自立しようという気持ちはあるが、なんだかその道のりがとても遠い気がしてきて憂鬱になつてくるのだ。

そう。あまりにも何もできないから……

生まれてから今までの時間、自分は一体何をやってきたのだろう。正登のような独立心が自分に少しでもあれば、もっと違う道を歩んでいただろうに。

けれども、溜息をついても仕方ない。

千紗は誰もいないのに笑顔を作った。無理にでも笑えば、脳のほうが楽しいと勘違いして、実際にそんな気分になってくると聞いたことがある。本当かどうか知らないが、溜息をつくよりはいいだろう。

千紗は食器を片づけた後、洗濯機を回していなかったことに気づく。最初に回していれば時間の節約になっていたはずなのに、うっかりしていた。昨夜教えられた使い方を思い出しながら操作する。

水が洗濯槽に入り出した後になって、洗剤を入れ忘れたことを思い出した。慌てて停止のボタンを押す。

「もう……わたしってば……」

洗濯機もちゃんと操作できないのかと思うと、泣きたくなってくる。いや、落ち着いて慌てずにやればできるはずだ。

洗剤のパッケージをよく読んで、どのくらいの量を入れるのかを考えた。

「このくらい……かなあ」

柔軟剤も置いてあったので、慎重に所定の位置に入れる。それからスタートボタンを押すと、また水が入り始めた。しばらく洗濯機の前で見守っていたが、どうやら上手くいっているようなのでほっとした。

「それから……掃除ね！」

掃除機を引っ張り出してきて、リビングからかけていく。家具があまり置いてないので、スムーズに進む。階段もないし、実家で掃除するときより楽だ。

書斎に入ると、そこはまるでホームオフィスのようだった。大きな机にはデスクトップのパソコンが置いてあり、プリンターや電話などがあつた。書類入れにはたくさんのファイルがしまつてある。

本棚に並ぶのはビジネス関係の本が多く、千紗が興味のある小説などはまったくなかった。

ふと、彰とは住む世界が違うのかもしれないと思つた。子供の頃から知っていて、家族ぐるみで付き合いをしていたから、同じ世界に属しているつもりでいたのだ。けれども今は違う。

わたしとの接点なんて昔の思い出だけじゃないの。

そう思うと、淋しい気持ちになってくる。せめて女性として見てもらえるなら希望が持てるのだが。

あのキスは……？

千紗にとつては胸がときめくキスだったけれど、彰にとつてはどうだろう。挨拶にキスをするような人ではなかったはずだが、彼はさんさん千紗のことを妹のようだとおっしゃっていたので、やはり挨拶代わりなのだろう。それに、好きな女性に対するキスにしてはあまりにも軽い。

少しでもいいから、わたしのほうを見てほしいのに。

しかし彼みたいな男性には、たくさんの女性の目が向けられているに違いない。外見があれだけ素敵で、性格は優しく誠実で真面目。しかも大きな会社のオーナー社長なのだ。

千紗はあえて彼に尋ねなかったが、付き合っている人がいてもおかしくない。心はまだ亡くなった恋人のものだったとしても、健康な男性がいつまでも一人でいるわけがない。だとしたらあのキスになんの意味もないということになる。

でも……やっぱりなんの意味もないってことはないはずよ。

意味がないなら、する必要もない。何かしらの好意の表れであってほしい。兄としての好意だとしても、彼はキスをしてくれた。そこにわずかながらの希望を抱いた。

二年も会わなかった人が、こうして心配してくれて、同居までしてくれるのだ。頑張って自立できるところを見てもらえれば、一人前の女性として扱ってもらえるかもしれない。

千紗は再び掃除機のスイッチを入れて床を掃除していく。書齋が終わると、次は彰の寝室に足を踏み入れる。

彼の半裸の姿を思い出し、千紗は顔を赤らめた。まさか寝るときは裸なのだろうか。そう思うと、単なる寝乱れたベッドにもひどく官能的な雰囲気を感じてしまう。

このベッドに彰さんが裸で横たわっていて……

ついそんな想像をしてしまった自分が恥ずかしくなる。彼が本当に裸で寝ているかどうかも分からないのに。いや、たとえそうだったとしても、淫らな想像をしてはいけない。

千紗は誰が聞いているわけでもないのに、コホンと咳払いをして乱れたベッドを整えた。それから掃除機をかけていく。

床に乾拭きのモップをかけるようにと、彰は掃除道具の置き場所を教えるときに言った。千紗は

それを思い出して、掃除機を仕舞った後にモップをかける。埃が溜まりそうな狭いところには、ハンディーモップをかけるようにとも言われたっけ……この後の作業を考えていたとき、千紗は彼にさり気なく掃除の手順を教えられていたことに気がついた。

本気で何もできないし、知らないと思われているんだわ。もしかして、彼はわたしに家事のやり方を教えるつもりで、ここに連れてきたのかしら。なんだか情けない気分になったが、文句は言えない。掃除機をかけるくらいの掃除しか、したことがなかったからだ。彼が指示してくれなければ、やる気はあっても、どうしたらいいか分からなかっただろう。

バスルームやトイレの掃除のことも説明を受けていた。もし窓拭きもしなくてはならないとしたら、掃除だけでどれだけ時間がかかるだろう。千紗は気が遠くなりそうだった。実家では掃除専門の家政婦を雇っていたが、一人で全部やろうとすると大変な労力が必要だ。

家事なんてもっと簡単にできると思っていた自分が恥ずかしい。慣れないながらもなんとかバスルームなどの掃除を終えた千紗は、リビングのソファに座り込んだ。

あ……洗濯物！

洗濯機には乾燥機能がついているが、それを使わずに干してほしいと言われている。慌てて洗面所に飛んでいき、洗濯物を取り出した。

千紗の衣類と共に出てきたのは、彰が身に着けていた物だ。いちいち想像してはいけないと思

ながらも、なんとなく意識してしまっ

もう……馬鹿みたい。

自分を叱りつつバルコニーに出て、不器用な手つきで一枚ずつ干していく。皺しわが寄っているけど、これでいいのだろうか。アイロンをかけるように言われたらどうしよう。千紗は今まで使ったことがないのだ。家政婦がアイロンをかけているのを見たことがあるが、自分にはあんなふうにはできないような気がする。

でも、やる前から諦めちゃいけないわよね。

洗濯物を干し終わると、バルコニーの手すりに手をつけて外を眺めた。慣れていないとはいえ、家事がこんなに疲れるものとは知らなかった。けれども、世の中の人は当たり前前にできるものなのだろう。

そう。わたし一人が何もできないだけで……

父の会社が発展していくにつれて、母は家事を家政婦任せにするようになったが、千紗が小さい頃は自分でなんでもしていた。つまり、分からないことがあれば、母に訊きけば解決するのかもしれない。

今になって思うと、そうしたことをもつと早く身につけようとするべきだった。正登はいち早く気がついていいたから、さつさと実家を出ていったのだ。それなのに、千紗はこんなふうには追い込まれるまで、自主的に何かすることを放棄していた。

ただ、流されるままに生きてきた。嫌なことから逃れて、苦にならないことばかりしてきて、頭

の中身も生活力も子供並みだ。父の会社が倒産したのはよくないことだし、それでいろんな人に迷惑をかける結果になった。だが、千紗はそのきっかけがあったから、自分を見つめ直すことができるのだ。

まずは、わたしを心配してくれている彰さんへの恩返しのために、メイド修業をしなくては！

千紗は自分の部屋に戻ると、スマートフォンを取り出してレシピを検索した。自分の腕前と作りたいたい料理の間にはずいぶん差がある。一応、本日の献立を考えてから買うものをメモした。初心者用の料理本も買いにいこう。レシピを見ても、意味が分からないことがたくさん出てくるからだ。

買い物に行く前に、改めて冷蔵庫を見てみる。彰は自分で料理もするようだが、基本は外食らしく、そんなに食材は入っていない。

もし、わたしが料理上手になったら……

彰さんは毎日早く帰ってきて、わたしの手料理を食べたがるかもしれないわ。二人でテーブルについて、おしゃべりにワインなんか飲んで。目と目が合ったら、彰さんが『これ、おいしいね』って言うてくれる……

つい新婚家庭みたいなシチュエーションを思い描いてしまったが、ふと我に返る。その前に、ちゃんと作れるようにならなくては。料理はできるなんて、どうして見栄を張ってしまったのだろう。そんなことを言わなければ、多少まずくても大目に見てもらえたかもしれないのに。

でも、早く料理上手になって、彰さんに褒ほめてもらいたい。

掃除や洗濯は頑張ったとしても結果が見えづらいが、料理は味ですぐに分かるからだ。おいしく

できたら、またキスをしてくれるかもしれない。

挨拶あいさつみたいな短いキスではなくて、本当のキスをしてもらえたらいいのに。

千紗は本当のキスなんてしたことはない。それどころか、今まで誰とも付き合ったことがないのだ。初恋の彰をずっと想っていたので他の男性が目に入らなかつた。二年前に彼に想いを伝えることなく失恋してからも、誰の誘いも受けなかつた。

今にしてみれば、まだ彰さんを忘れられていなかったからなんだろうけど。

それくらい彼への気持ちは強い。しばらく会わなかつたのに、彼以上の男性なんていないとも思ってしまうのだ。

千紗は好きな人と同居できる喜びを改めて噛み締めつつ、近所のスーパーに出かけた。車に乗っていたときは近く思えたが、歩いてみると十分くらいかかった。カートに籠かごを載せて必要なものを入れていく。

しかし、ちょうどお昼時でお腹が空いていたせいか、必要ないものまで次々と籠に入れてしまっていた。

だって、朝食にヨーグルトやフルーツが欲しいし、パンにはいちごのジャムをつけたいし。サラダにトマトがあると嬉しいし、肉が今日だけ二割引きだって書いてあるから、買ったほうがいいに決まってるわ。

自分でも少し買すぎかと思つたが、精算してから途方に暮れた。荷物があまりにも重たかつたのだ。これを持って十分の道のりを歩くのかと思うと、眩暈めまいがしてきそうだった。

迷つた挙句、結局タクシーを呼んでしまった。

千紗はとんでもなく自己嫌悪おんごに陥おちつた。

こんな馬鹿はきつとわたしだけよ……

ついタクシーに乗ってしまうのは、裕福だつた頃の悪い癖だ。千紗は高校生の頃から、どこかに出かけるたびに、何かとタクシーを利用してはいた。けれども、今はもうそんなことはできない。

今度からは歩いて持つて帰れるくらいだけの買い物しよう。

千紗はそう決心して、食材を冷蔵庫に入れた。それからコーヒを淹いれ、昼食用に買った菓子パンを食べる。こんな食生活はよくないかもしれないが、今はどうするべきなのか考える心の余裕もなかつた。

頭の中は夕食のことだけだ。正確には、その夕食を味わう彰のことで頭がいっぱいだった。

彰さんに喜んでもらいたいのに！

千紗はそれをひたすら夢見ていた。

出来上がった夕食はかなり悲惨なものだった。

途方に暮れていると、玄関の扉が開く音がした。彰が帰ってきたのだ。千紗は玄関へ行き挨拶をした。

「お帰りなさい、彰さん」

「『ご主人様』じゃないのかいっ？」